



日本ではひと昔前まで、石油ストーブといえは暖房に使われることが多かった。芯を使ってそれに石油を吸い上げさせて燃焼させるタイプのものだ。記憶にある人も大勢いると思うが、マッチを擦ってフードを上げて火をつけようとすると、独特のいやなニオイがしたものだ。点火に手間取ってぐずぐずしていると黒い煙が上がる。あれは不完全燃焼をしていたからだ。プリムスは芯を使わず、ガスも出ない。燃料のオイルに圧をかけて気化させた燃料を燃やすからである。そのため初期のプリムスのストーブには空気を送り込んで圧を高めるためにタンクの横手にポンプ用の取っ手が付いていた。

スウェーデン生まれのプリムスは現在、世界の70カ国以上の国や場所でも販売されている。売りにげの金額面では、スウェーデン国内の販売が占める割合は1割に過ぎないという。この数字は、プリムスがいかにか世界に浸透しているかということを示している。プリムスが世界への扉を開ける時に、大いに役立ったのが20世紀初頭の探検家たちだった。グリーンランド横断や北極や南極の極地探検に赴いた人ひとには、すでに挙げたフリリヨフ・ナンセンがおり、1911年に南極点に到達したロアル・アムンセンがいた。アムンセンは自身の装備に入れておいたプリムスのストーブがいかにか役にたってくれたかを証言する言葉を残している。もちろんプリムスは彼の言葉を記した広告をつくって、

## 高い燃焼力で力仕事をこなすプリムス

セールスに役立てた。ところでプリムスが作った製品でなくても、かつては旅行案内書などに同じ燃焼方式のストーブがプリムスと表記されていることがあった。固有の名称であるはずのプリムスが、一般名詞として受け止められるほど広まったからとも考えられる。本場のところは、スウェーデンのプリムスの特許有効期限が切れた後も、同方式のストーブはプリムスと呼ぶようにと求めていたからである。

パラフィンストーブをつくる後追いのメーカーは多数存在し、1950年代を迎えると競争はますます激しくなった。そのなかでエボックメーカーがトクとなるニュースもたらされる。1953年



Nyberg's "Viktoria" was a failure. A later and improved model, which he called "Svea" was marketed by Max Sievert and achieved world sales, at least if the advertising card reproduced at bottom left is to be believed. In terms of volume, however, the biggest product was still the blow-lamp, which was manufactured in a variety of models and sizes.



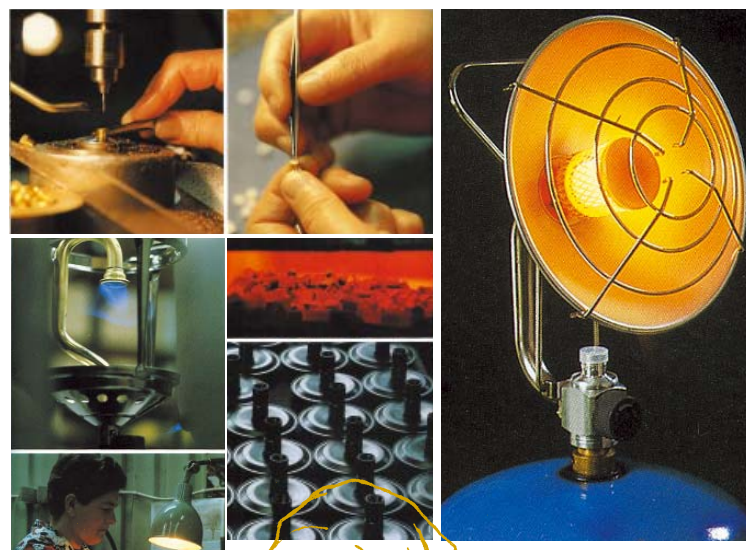
にエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイがエベレストの初登頂に成功したのだ。冒険や探検を成功させる鍵は、いかに準備をするにかかっている。具体的にはどんな道具を使うか。何を準備するか。その意味でエベレスト初登頂の装備に、プリムスが含まれていたことは、最高の栄誉だった。海拔8848mという世界の最高峰の地で、極寒と気圧が低いなかでも、燃料を気化させて燃焼させるプリムスはちゃんと機能することが証明された。以後、山に登る人たちの装備のなかに、プリムスの居場所が確保されることになる。彼らが担いでいくバックは、スペースが限られていて、また可能な限り、負荷を減らすために軽量化が必要がある。プリムスはそのどちらの要求にも応じた。コックヘルや風防を入れた子式にしたのもその工夫のひとつである

し、ゴトクを取り外すことができるものにしたのもそう。これは現行商品のデザイン設計にも引き継がれていることになる。プリムスは1892年から2010年の現在まで、ざっと5世代に相当する時間を過ごしてきたことになる。ひいおじいさんのそのまた父親にあたる高祖父の代から、プリムスを使ってきた人がいる可能性があることになるわけだ。もちろん同じモデルのストーブではないだろう。けれどそれだけの代を重ねながら、基本的に同じ道具が使われてきたことにはちょっと驚いていい。そこで、長寿商品になった理由を考えないわけにはいかない。まず道具を考えたら、クワイエットがいて、それを設計してデザインをして売った。それだけでは地元の主婦たちの手に渡るだけで、ストックホルムの町はおろかスウェーデンを出ることさえでき

なかつただろう。そこにB.A.ヨート社が現れる。具現化された道具を売ることに長けた人たちがいた。そして長寿商品の生命のサイクルを循環させるために欠かせない最後のピースが、その道具を使う人たちである。あらためて考えるまでもなく、この人たちは歴史に名前を刻む偉人や、探検、冒険家ではない。名もない一般の人たちが、5世代に渡って使いつづけてきたことがプリムスを現在に連れてきた。わざわざ山に登りに行かなくても、ふだんの生活が外界から途絶されている状況はいくらでもある。電気や水道といった生活を支える基本ラインを当たり前にしていても、それらが途絶されることに備えることが求められる時代がやってくる。

## 夢のプリムスを買ってお家に帰ろう 家庭で大活躍するプリムス

左は1950年代に販売したLPガスによるガスストーブ。これは反射板を取り付けることで暖房用ヒーターとしたもの。現在のプリムスの製品にもスパイダー・アウトドアヒーターがラインナップされている。左奥の一連の製造現場の写真は、ハグフォースにあったプリムスの工場のもの。LPガスを使う製品を製造しているところ。下はLPガスストーブを使いアウトドアで茶をいれて楽しんでいる光景。時代は1950年代のもの。こうしたシーンは現在も変わらず繰り返されている。



右)プリムスはアウトドア用であると同時に、家庭用のコンロとしても使われた時代を過ごしている。それは売れる側と客となる側が双方顔見知りの関係で、ゼネラルストアが元氣だった時代だ。下)プリムスの長い歴史の中では、ストーブ本体だけでなく魅力的な付属品がそろったモデルの風防とコックヘル。順調な燃焼に必要な空気を取り入れ、風で炎が消えるのを防ぐガード役を兼ねた風防とコックヘルなどが入れ子式になり、コンパクトに収納できる。火で熱くなったコックヘルをつまみ持ち手も準備されていた。アウトドアで使う時を想像するだけでも楽しくなる。



18 家庭で働くプリムス向き合ったのは女性だ。かつてはアイロンを温めることもした。料理やコーヒー豆を煎ぐ、パンを焼くなどは事務所はキッチンだけでなく、食卓や食の場場、食卓へへの移動は携帯性に優れたプリムスの得意とするところだった。



アウトドアで湯気上げる飲み物や食べ物を口にできることは最高の贅沢である。



を發揮した。そこに使われていたX字ゴトクは、現在でも健在だが、プリムスの道具としての力を象徴している。ゴトクとはナベを安定させて乗せるのが本来の役目だが、これは風が吹き付けた時に炎の立ち消えを防ぐこともしている。風が炎口の全フロックに吹き回らないようにしているからだが、X字にゴトクを組むだけでそれをやってのけている。つくりは実に簡潔なのに不足はない。初代モデルの出力は2580 kcal/h、1995年モデルから現在の3600 kcal/hにアップしている。本体は小型であるのに、やることは大きなサイズのものに負けないという道具にも扱える楽しさがある。プリムスでは114 ナノストーブがそれにあたる。これはバーナーにMFM（マイクロファイバーメタルメッシュ）を採用している。太さが

スウェーデンのストックホルムを出て100年を超えて使われつづけている道具。日本のアウトドアにもプリムスがいる。



火は人が生きていく上で欠かせない。熱を利用して、明かりとしても使ってきた。プリムスはその火を持ち運べるかたちにした。火を制御する道具であり、火を制御する道具である。もしも大自然のなかで、または真の闇のなかで青く燃え上がる炎を前にしたらきつと、その美しさに吸い込まれるように魅せられてしまつてちがいない。

フィールドで火を操るのは最高の楽しみ。細部まで練りあげられた道具はそれを所有している楽しみも連れてくる。



アウトドアでの大きな楽しみのひとつは、野外でつくる食事だ。温かい食事を食べることもできることながら、料理すること自体が楽しい。そこに小さな料理用ストーブがあれば、それを駆使すること自体が楽しくなる。道具を扱うことそのものが楽しみひとつになるのだ。

プリムスが日本で本格的な販売に乗り出したのは1985年である。その当時すでに人気モデルとなつたのが2243バーナーである。これはバーナーのヘッドに288個の炎口が開いているバーナーで、優れた燃焼力



22マイクロンという極細のメタルファイバーを織り込むことで、バーナー孔を細くメッシュ状にすることを實現したというのだ。その働きは空気に混合されたガスをより好ましい状態でバーナー部へ送り込んだ結果、バーナーヘッド回りからの酸素が届きにくい中央部もMFMの効果で表面燃焼させることに成功した。ゴトクはブレッドタイプであり、傘のようにすばめて収納できる。標準装備されている延長ゴトクを扱うのもメカメカしい気分です。使いやすい。アウトドアで使う道具は、使い終わって収納する時のことを含めて考えられている。伸張式のゴトクばかりでなく、圧電着火装置も着脱可能なつくりになっている。



**2243**  
バーナー

圧電点火装置付き 2~4人、グループ、ファミリー向き。  
出力4.2kW/3600kcal/h。(T型ガス使用時)、燃焼時間は約55分(IP-250タイプガス使用時)  
ガス消費量250g/h  
ゴトク径120mm、収納サイズ10.7×10.7×5.9cm  
本体重量253g、価格8190円



**114**  
ナノストーブ

着脱式の圧電点火装置付き 1~2人向き、単独行動時に最適。  
出力2.7kW/2300kcal/h。(T型ガス使用時)、燃焼時間は約90分(IP-250タイプガス使用時)  
ガス消費量150g/h  
ゴトク径最大120mm、最小90mm  
収納サイズ5.5×7.7×2.8cm(本体のみ)、6.5×7.7×2.8cm(圧電着火装置装着時)  
本体重量51g、圧電着火装置部13g、価格7140円

**エクスプレス**  
スパイダーストーブ

ガスプレヒート機構内蔵。コンパクトで軽量な分離型バーナー。出力2.8kW/2400kcal/h(Tガス使用時)、燃焼時間は約70分(IP-250タイプガス使用時)、ガス消費量195g/h、ゴトク径154mm、収納サイズ10.5×8.5×6.0cm(本体のみ) 重量198g、価格8610円



**イー・タ・バックライト**

圧電点火装置付き、ガスプレヒート機構内蔵。省エネ設計の分離型バーナー。  
出力2.2kW/1800kcal/h(Gガス使用時)、燃焼時間は約100分(IP-250タイプガス使用時)、ガス消費量140g/h  
収納サイズ21.5×19×13cm  
重量572g(本体、1.2ℓ専用ボトル一式、風防)  
価格1万5750円



圧電点火装置付き。1~3人向き、現在のベストセラーモデル。  
出力4.2kW/3600kcal/h。(T型ガス使用時)、燃焼時間は約55分(IP-250タイプガス使用時)  
ガス消費量245g/h  
ゴトク径最大148mm、最小90mm  
収納サイズ7.5×8.8×3.0cm  
本体重量110g  
価格8925円

**153**  
ウルトラバーナー

**172**  
ハイパワーバーナー

圧電点火装置付き 2~4人、グループ向き。  
出力4.9kW/4200kcal/h。(U型ガス使用時)、燃焼時間は約50分(IP-250タイプガス使用時)  
ガス消費量268g/h  
ゴトク径最大190mm、最小110mm  
収納サイズ8.8×8.0×7.8cm  
本体重量184g  
価格9240円